
旅

影司るは涼の名

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
旅

【Nコード】
N8245C

【作者名】
影司るは涼の名

【あらすじ】
旅する者は何かを導き、何かを造り、何かで消える。旅する者は何かを思い、何かを伝え、何かを残そうとする。これはその旅する者の物語。

第一話 旅する者

旅。それは道を造りしもの。旅。それは果て無きもの。旅。それは思い連なるもの。旅。それは……。

古木で作られた屋根の下、一人休む人がいた。髪は黒く、天然のせいかいろいろな方向に飛んでいる。目は夕れ目で細く、死んだような目とも言われていた。周りで遊ぶ子供たちをよそに、休む人は深くため息をついた。壁に背をもたれていると、屋根のついた家の主人なのか休む人に話しかけてきた。戸も開けずに。

「その旅のお方。そこで休まれていると迷惑になりますので……」

「周りで遊ぶ子供は迷惑ではないのか」

「ええ」

「ふっ……」

「その人」は屋根の下でもう一度かすかに笑うと、その背を壁から離すと側に置いていたおかしな形の荷物を持ち上げる。その後、子供が遊ぶ中を横切つてその場所を後にした。

空は灰色と青色の生み出す不思議な色となっていた。風が吹かない町の中を屋根で休んでいた人が歩く。周りの人が目に止めるのは、「その人」の右手に持ったおかしな形の荷物。人々は「その人」を薬屋、密売人、泥棒などと噂した。もちろん、彼はそのどれでもなかった。

しだいに、周りの噂話が耳に入るほどの静けさになってきたのかもしれない。

「……先代の人の祟りかも……」

「……急病か流行り病じゃないかしら、でも……」

空が完全に灰色と化した今、噂話は「その人」の話ではなかった。

「その人」が歩いていくほど、噂話に共通点が見え始め全てにおいて「先代」と「病」の言葉が出てくる。目に映る道に注意すると、だんだんと道が細くなる。ふと、「その人」は周りに目をやった。一本道を挟むように並ぶ店は、初めに休んでいた古木で作られた屋根とは比べ物にならない屋根だった。

家の全てが銀でできているような家、派手はでな看板。どれもこれも目に留まらなければ視力のおかしさを注意できるほどのものだった。それでも「その人」は歩き続けた。

馬と家臣ぐらいしか通れないほどの道になったとき、目の前に城が見えた。大きな城でもう少し遠くから見えてもいいくらいだった。彼だけがそう思ったのかもしれない。

第二話 通るわけではない(前書き)

あらすじ…旅する男は噂の広がる街を歩いていた。

第二話 通るわけではない

「止まれ！ 貴様何者だ！」

一人の門番が「その人」を大きな木で造られた門の前で食い止める。城全体が見渡せないくらい下にあるこの門は、雑用の者が通るにふさわしいほど汚れていた。他にも門があるのだが、街中から来た者にはこの門しか訪れることができなかった。門番の持つ槍の先で首を狙われた「その人」は門番の質問に答えた。

「見ての通り、旅のものですよ。そうとしかあなた方には言いようのないことでしょうか？」

「旅のものがここに何の用だ！」

「私の場合は旅に「目的」を同伴させないのでね。要するに用はないですよ」

門番の男は槍を構えたこの姿勢が苦しかったのか、槍を右側に引き寄せ「コホンツ」と咳をすると、質問を続けた。

「ではなぜここに来た！」

「ふっ、面白いことを聞く人だ。あなたはここに何年勤めている？」

「は？ 貴様！ 話をたぶらかさうとしているな！」

門番はもう一度槍を構えようとした。だが、「その人」の方がいち早く左手の平で止める姿勢をとっていた。

「違いますよ。真実が足りないだけです。今この場で反論するならば私には真実が少なすぎる。さあ答えていただきたい」

「む、むう。た、たぶん六年ほどだ」

「ならば、あなたはこの道がこの門に続くことぐらい分かるであろう。それを見てみぬふりをし続けてきたならば、あなたはしっかりとこの道からやってきた人を見ていないことになる。違いますかな？」

「む、む・・・」

門番の男は口を開けなくなってしまうた。自分の勤めているこの

仕事がどれだけ下僕のすることであろうと、誇りはあった。今回のことも誇りあるがために質問しただけのこと。しかし、ここまで反論されてしまい、なおかつ、仕事の真面目さまで注意されてしまったのは矛盾が生じてきてしまう。

「しかし・・・」

一人悩んでいた門番に更なる言葉が飛び掛ろうとしていた。門番は「次に反論及び注意が来たらこの仕事をやめてやろう」と思っていた。そこまで仕事に誇りを持っていた。だが、あせりは人を愚かにさせた。

「あなたも門番としてのこと。別に悪いわけではないですよ。第一、屁理屈のようなことを言ったのは私のほうですから」

「は、はあ・・・」

「では、私はこの城を通りたいわけではございませんので」

「へ？」

門番は呆れ顔で「その人」の顔を見つめた。

「この門を通っていいか。それを見極めるのがあなたのお役目。私は城を訪れるわけではないので・・・」

そういうと、「その人」は呆然と立ち尽くす門番の横をすんなりと通っていき、同じように門も通った。

「その人」は門を通った後、右の城壁に沿って歩き、城壁の隅にある扉から外へ出た。城の周りの長い迂回路を通って城を通らずに道を進んでいこうとした。

心配事が一つあった。それはここがこの城の領地であること。すなわち、この城の領地に勝手に踏み入っていることである。たとえ、門番が許したとはいえ、そこが城主にとって大事な場所ならば最低なことと同じになる。嫌なことは的中した。

「貴様何者だ！」

ぼつぽつと雨が降り始め暗くなる中で、「その人」は城の周りにある森林の中で、見回りをしていた兵士に見つかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8245c/>

旅

2011年1月3日20時23分発行